テクノを愛するあなたにCMJKからのメッセージ。今月はノイズ・ループについての講義だぞ。

CMJK GROOVE CONTROL

VOL.3 Breaks, Beats & Samples Pt. 2

リアル・テクノにおけるノイズ・ループ

かつての“テクノ・ポップ”とは似て非なる存在である現在のテクノ、それをCMJKは“リアル・テクノ”と呼びます。そのリアル・テクノの本質を確認しようというこの連載の目的は「マニュアルにないことをやってみよう」といったものです。さて、今月は前号に引き続き「ブレイク・ビーツとサンプル」についての第2回目、ノイズ・ループにテーマをしぼって講義を進めていこうと思います。

写真・足立あき子
文・木村公彦

●音楽的でない音を音楽として再構築する

——今回は“リアル・テクノにおけるノイズ・ループ”がテーマということですが、まずノイズ・ループとは何かという部分から説明をお願いします。

CMJK：えーと、僕、電気グルーヴ時代に「もっとコード感のあるものをたくさん使え」とディレクターによく怒られてたんですけど、やっぱり打ち込みであっても、たとえばCのコードの場合、白玉でパッドをずーっと引っぱっていくより短いゲートでパパッパパッパパッと16分音符などで切ってやったほうが、たぶんテクノをあまり知らない人でも「あっ、テクノだ」と感じると思うんですよ。そこで、コードであるとかベース・ラインであるとかの音楽的な考え方を1回ひっくり返してみようというところが、ノイズ・ループの醍醐味だと思うんです。

——というと「コード感のあるものを使わない」ということを突き詰めちゃうとホントにノイズになってしまうんだけれど、それをやりつつ微妙なところで楽曲として成立させるということ？

CMJK：アイン・ストゥルツェンデ・ノイバウテンというバンドがおりまして、金物をひっぱたいたりして音楽を作っていた人たちなんですけど、“解体／再構築”的、80年代ニュー・ウェーブ的な部分にも通じるかとも思うんですよ。だから、音楽的でない音を音楽として再構築するということで、すなわちニュー・ウェーブ的だなあ、と。サンプリング・マシンというのは、世の中すべての音を音楽に置き換えられる機械であって、そういう考え方に忠実にやっていることがノイズ・ループなんじゃないかと思うんです。

●リズムですらノイズで構成してしまう

——そこで、なくてもいい音を導入する意味というのは？

CMJK：で、たとえばその曲の基本的なコードというのがAだとすると、イントロでAを持ってくればわかりやすいじゃないですか。

——はい。

CMJK：ところが、僕の場合は、電気グルーヴ時代からイントロでガガガギーとかそういう音ばっかり持ってくるのが好きだったんですけれど、ディレクターに「そんなものは、なくてもいいじゃないか」と言われてしまう。ディレクターにしてみれば、それは“なくてもいい音”になるわけですよ。僕としては、それがおもしろかったんですけど。で、一時期流行ったんですけれど、曲が終わってからブブブブーっていうレコードの針の音を入れておくとかね。それだって“なくてもいい音”なんですけど、それは志向の問題で。あと、人間が日常に聴くことができない周波数ってあると思うんですよ。すごい高い音とか、すごい低い音とか。そういう音が唐突に出てくると、誰しも驚きますよね。

——たとえば、曲中のSEというものがありますけど、それとは区別して考えているんですか？

CMJK：あのー、ひと昔前までは、イントロあるいは間奏などでSE的にそういう音を持ってくるというものばかりだったんですけど、いまは曲中ずーっとそれをループして“ノイズをむりやりグルーヴにしてしまう”という人たちが多いんですよ。で、それがおもしろいんです。だからリズムで言えば、キックがあってスネアがあってハットがあって…という発想が崩れつつあるなと思います。リズムですらノイズで構成してしまう。

——たとえば工事現場の“ドッカンドッカン”とかをサンプリングして、切り取ってしまう？

CMJK：ええ、そうですそうです。

●ノイズをサンプリングしてくるのではなくて、シンセやリズム・マシンを加工する

——それでは、アーティスト的には、どういう人が参考になりますか？

CMJK：はい。まず、毎回出てきて恐縮なんですけど、いま僕が大プッシュしたいのがアフェックス・ツイン。この前、友だちがロンドンでライブを見てきたんですけど、シンセそのままの音を出さないで、ギター用のエフェクターをかけたりしているらしいです。アフェックスの場合、ノイズをサンプリングしてくるという発想ではなくて、アナログ・シンセサイザーなり、リズム・マシンなりを加工してノイズを出している。これもすごいおもしろい。

——それじゃ、飲みものでも飲みながらCDを聴きましょう。

CMJK：『3rd Analog Bubblebath』（AFX名義）というCDを……（と、CDをかける）。まあ、昔のインダストリアル的発想の応用と言えるんですけど。

——このドンドンという歪んだ音はなんですか？　バスドラ？

CMJK：最近、みんなやるテなんですけど、単純にゲインをグワーッと最大に上げてフェーダーはちっちゃくして、卓で歪ませているんです。このハットなんかも、ショート・ディレイ的な、ちょっとワウがかかっているような、いちいちこういうふうにしないと気がすまない人なんですね。……これは、掃除機ですね。プチッという音も入っている。…この曲は、このあいだ宜保愛子の番宣のBGMに使われてました（笑）。ヒューッという音は、SYSTEM100。「これダンス・ミュージックか？」と思うかもしれませんけど、ロンドンでライブ見てきた友だちによると、パンクスがダイビングしてるそうです。

『Selected Ambient Works 85-92』
Aphex Twin（輸入盤）

——え、客層もそういった感じなんですか？

CMJK：ちょっと文化的な話をすると、ロンドンでは今“スキッピー（スキンヘッズ・ヒッピー）”っていう人がすごく多くて、聴いている音楽はテクノなんですよ。そういう層に熱狂的に受け入れ